

## 教育用計算機システム（ECCS）相談員の声

はじめまして。ECCS相談員の井出と申します。1年半ほど前から駒場地区で勤務しており、今後も本郷で勤務を続ける予定でございます。今回、本誌に紙面を頂く機会を頂きましたので、システムや勤務内容についてご紹介差し上げたいと思います。

ECCSとは教育用計算機システムの略です。駒場・本郷の随所に配置された1000台を超える端末は、もれなく16GBのメモリと高速なCPU（授業では3DCGや科学計算も扱われますが、それらが十分に快適に動作するのに足りる性能なのです）を備え、どこからアクセスしても数分かからずにWindows環境とMac環境にアクセスすることが可能です。その他にも、印刷機、課題提出プラットフォームから、昼夜問わず使用可能なリモートアクセス環境、高価な学術ソフトウェア・各種サービスのライセンス提供など、学生・教職員の学習・研究活動をサポートします。最近では2019年より、高価な数値解析ソフトウェアであるMATLABのライセンスが無料で提供されるようになったのも記憶に新しいです。

一連のシステムによって提供されるサービスは非常に幅広く、その全貌を把握している学生はごくわずかです。折角の恵まれた機会に気づかずにいる学生がいるのもとても残念なことですが、いざ使おうという段になっても、その使い方に慣れておらず戸惑う人々が多くいらっしゃいます。私たちECCS相談員は、そんな人々の質問に答えることによって、相談者の手助けをするために日々活動しています。

そんな日頃の相談員としての活動に加えて、gmtech と呼ばれている、相談員統括業務も行っています。gmtech は、ECCS相談員の勤務管理システムの他、週に一回ほど相談員の間でその週にあった事例を交換するミーティングを運営し、さらに得られた知見などをWebサイトにまとめる業務を行っています。相談者から受ける質問内容はECCSシステムに関するものから、大学によって管理されている学務システムやアカウントに関する質問、さらには授業の課題の質問まで、非常に多岐に渡り、相談員がすべてを咄嗟に判断することが難しいことも多々あります。ミーティングはそのような情報を共有する場として欠かせないものです。また、過去の相談内容やよく質問を受ける内容などをまとめたWebサイト「ECCS Tutor's page」（<https://www.sodan.ecc.u-tokyo.ac.jp/>）には濃密な知識が集積され、今ではECCSとは直接関係ない人からも有用な情報として参照されるページも出てくるに至りました。

ところで、最近ECCSのホームページ（<https://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/>）の右下に「チャットボットでのお問い合わせ」というリンクが現れました。どうやら、ECCSのホームページの情報を学習して対応してくれるそうなのです。AI時代の波はここまで押し寄せてきて、「AIが人間の仕事を奪う」というSF的未来がやってきたか、などと思ったものの、幸か不幸かそのレベルには至っていないようです。思えば現代の人工知能ブームの影響かWebサイトの隅に「人工知能」を標榜するウィンドウを見る機会

も多くなりましたが、その実状は選択式で応答するものやごく簡単なものに限られません。ましてや前述のように、相談員から受ける質問内容は多種多様に渡るので、現在の自然言語処理や意味理解のレベルでは残念ながらまだ実用化には至らないのでしょうか。

ECCS相談員はこれからも、相談者の悩みを解決するために、ウェブサイトの片隅ならぬ、部屋の片隅で待機しております。AIに負けないように、というにはまだ時代は早い気がしますが、皆様お気軽に相談にいらしてください。

(駒場地区相談員 井出竜鳳)

本郷巡回連絡員の竹内と申します。駒場で1年半相談員を、本郷で半年巡回連絡員をつとめ、あわせて相談員経験は2年弱となります。

相談員をしていると、あるいは私の場合は個人的に情報を集めているところもあるのですが、学内のシステムについて自然と詳しくなります。その一方で、ユーザの素朴な目線を忘れがちになってしまっているのではないかと、思うこともあります。たとえば、東京大学新聞2019年6月11日号に「連携強化目指すも難航 ITC-LMSとUTASの違いって？」という記事が掲載されています。大学の論理からすれば学務システムであるUTASと学習管理システムであるITC-LMSが分かれているのはそんなに不自然なことではない、などと並べ立てたくなってしまうわけですが、学生からすればどちらも授業に関係するシステムであって、いたずらにいたりきたりさせられる以外の何者でもないわけです。そういう意味では、相談員は学生の立場としてシステムを利用するユーザであり、また一方でシステム側の事情もある程度わかっている、という地味に貴重で重要な立ち位置なのではないかと思ったりするわけです。

さて、いち学生として、最近、「うわっ…ITC-LMSの知名度、低すぎ…？」なんてことを感じています。(この欄の読者はご承知のとおり) ITC-LMSは、情報基盤センターの運用する学習管理システムであり、教材のダウンロード配布やレポート提出などの機能を備えています。私の受けている授業でもかなりの割合でレジュメやスライドなどの教材のデータ配布がされているのですが、その配布にITC-LMSが使われていないことが多いのです。そのかわりに、Googleドライブなどのクラウドサービスの共有機能を使ってみたり、教員の個人的なウェブサイトや研究室のウェブサイトに置いてみたり、ついでにBASIC認証をかけてみたりするわけです。教員は毎年同じやり方でやっていれば済むのですが、学期に十何個もの授業を受けている学生としては、それぞれの授業ごとに資料が配布されるウェブサイトを把握し、場合によっては長ったらしいURLを手打ちし、パスワードをメモし、毎週アクセスして更新を確認し……とやらなければならないわけで、いくら相談員であっても、ICTシステムの操作に

長けていても、こればかりは煩雑で面倒というほかありません。ましてや、ICTに疎い学生からすれば、記号が多数含まれるURLをスマートフォンで入力するなど苦行でしかないでしょう。もちろん、ITC-LMSを使えば、すべての授業のデータが1箇所からダウンロードでき、教員もダウンロードできる範囲を自動的に履修学生だけに制限することができ、いいことづくめであるのは言うまでもありません。あるいは、データ配布に限らず、レポート提出にしても、データ提出でもいいようなレポートなのに、わざわざ授業のない日にレポートボックスに提出するためだけに大学まで往復数時間、などという悲劇は少なからぬ学生が体験しているでしょう。

それでは、どうしてITC-LMSが使われないのでしょうか。それはひとえに、教員がITC-LMSの存在を知らないからであると感じます。実際、私の見聞きしている範囲でも、学生が教員にITC-LMSについて説明し、ITC-LMSが使われるようになった、という例は何件かあります。詳しくない学生の立場から素朴に考えれば、全学のシステムで入学直後の学生でも知っているものを教員が知らないというのはおかしな話ではないかとも思うのですが、これが現状なのです。情報基盤センターも全学の教員に門戸を開いて「システム利用説明会」なるものを行っていて、手をこまねいて(?)いるわけではないと思うのですが、正直、まったく行き届いていないというのが実態であるというのもまた事実なのだと思います。情報基盤センターがいくら全学の組織であるといっても、各学部が相当な独立性を持って動いている本学において、全学の教員にITC-LMSを普及する、というのはなかなかの難事業であるのでしょうか（そのあたりがいかにも東大、という感もするところですが）。とはいえやはり、いち学生として、なんとかなるまいか、と思わずにはいられません。

というわけで、ささやかながら私にできることはということで、草の根の運動でITC-LMSを広めていくことはできないかと思っています。この文章をお読みのみなさま、先生方におかれましては、ぜひ先生方の間でITC-LMSを広めていってはいただけないでしょうか。そして学生のみなさま（これを読んでいる学生は相当めずらしいと思います）、ITC-LMSを使わずに教材のデータを配布している授業があったら、先生に一声かけてみてはいかがでしょうか。

長々と相談員業務とほとんど関係のない事柄を書いてしまいましたが、制度やシステムの都合を押し通すのではなく、ユーザである学生としての立場に寄り添うということは、相談員の基本的な姿勢として重要なのではないかと思います。今後もそうした姿勢を忘れることなく相談員としてつとめていけたらと思います。

(本郷巡回連絡員 竹内 朗)